

今、東京に出向くと街はオ

リンピックムードですが、東
日本大震災の被災地は昨年の
発生五年を境にマスコミも遠
ざかり、確実に忘れられてい
る不安を感じます。風化はし
ているけれど風評被害はなく
ならない事実もあり、原発事
故後の困難は一層深まってい
ます。

福島から「自主避難」した

東北 復興日記



▶▶▶ 209

まだまだ



ベテランママの会代表
番場さち子さん



放射能正しく知り堂々と

子どもたちがいじめに遭って
いた問題が浮上してきます
が、今に始まったことではあ
りません。子どもに限らず大
人も数多くの差別を受けてき
たのです。

震災直後に立ち上げた任意
の市民団体「ベテランママの
会」は、弱者の声に耳を傾け
ることからスタートしまし

た。当初は津波から逃げると
いった壮絶な体験談が主でし
たが、その後、一番多く寄せ
られたのは、福島から避難し
た方々が経験した差別やいじ
めについての相談でした。

「被災者とバカにされた」

「福島ナンバーの車にくぎの
ようなもので傷つけられた」
「車に生卵をぶつけられた」
「放射能うつるんじゃない、
とばい菌のように扱われた」
。ひどい例では、玄関前に
人の汚物が置かれていた、と
いう話もありました。

私自身、避難生活で体調を
崩して関東の病院を受診した
ら、福島在住を理由に別室に
通されるという差別を体験し
ました。私たちはそれほどに
けがれた存在になってしまっ
たのでしょうか。

二〇一一年の暮れ、東京大
学医学部研究所から毎週、福

島県の南相馬市立総合病院に
来てくださっていた坪倉正治
先生と会い、放射線を正しく
知ることの重要性に気づきま
した。そこでベテランママの
会の活動として放射線勉強会
をスタートさせました。写真
真。それもこれも、不安でた
まらない人々のストレスを少
しでも和らげたい思いからで
した。

今、私はこう言えます。「放
射能はうつりません。知らな
い人には、そう教えてあげま
しょう」。福島の人には、原発事
故があったからといって恥じ
ることは何もないのです。

◇

番場さんと、星槎大の細田
満和子副学長の往復書簡の形
でお届けしています。